神様と事務員

ブルテリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神様と事務員

【Ｎコード】
Ｎ２５８３Ｙ

【作者名】
ブルテリア

【あらすじ】
神様と大学事務員のほのぼの恋話。

1　神様（前書き）

郷里を離れて数年。寂しくなったので、郷里の風景をモデルとした、なんちゃってファンタジーを書いてみました。
地名・方言等は出しておりませんが、特徴あるモノが作中に書かれていますので、分かる方には分かると思いますが、フィクションであることご了承ください。

1　神様

1週間前から職場がおかしかった。

課長と主任がちらちらこちらを見ているし、先輩達もなんだか腫れ物を触るような感じでいつもと違う奇妙さがあった。

入社して、早半年。ミスもだいぶ減らせたと思う。それでも、完璧とまではまだ言えない。戦々恐々と上司達の視線を気にしていたけれど、3日経っても何も言われないままだった。

そして、昨日定時上がりをした私が忘れ物に気づいて職場へ戻ったとき、聞いてしまったのだ。

「ねぇ、タマさん、出来ると思う？」

佐々木主任、私に何をさせるつもりですか。

ちなみに、タマさんとは私の職場でのあだ名だ。自分のことを話していると気づいたら入り難くなってしまった。業務終了後でロールカーテンがかかっているので、これ幸いとカウンターに隠れる。

盗み聞きは悪いことだが、自分の身に何かが起きようとしているのを聞き逃せようか。

「どうでしょう。でも、タマさんは結構素直ですし、仕事って言えばちゃんとしてくれると思います。あちらが悪い方でないのは保証されているようなものですし」

鈴村先輩、なんだか微妙ながらも評価をしていただきありがとうございます。でも、その言い方だと何か面倒くさいことが起きそうで不安です。

「まあ、明日あたり佐々木君が連れて行ってよ。うまくいくかどうか心配するのはそれからだ」

谷課長まで…。そんなにみんなが心配する業務できるんだろうか。
１週間前からこのことをみんな気にしてたんだ。不安でいっぱいになりながら帰宅した。
取りに行った忘れ物はそのままにしまったのでよけいに気分が重くなった。

私の職場は、大学事務課。仕事内容は備品の手配や学生の履修や奨学金手続きに始まり、時期によっては成人式用の着物の見本市や一人暮らしの不動産紹介なども企画する。まあ大学の何でも屋だと言える。

今朝、朝の伝達が終わって主任から声をかけられた。
「タマさん、ちょっと新しい仕事教えるから来てもらえる？すぐそこだけど外にでるから」
昨日言っていた件が来たのか。でも、外？
疑問が多いが、待たせるのは悪い。準備をする。
とは言っても、秋口で少し涼しくなってきたためカーディガンを羽織るだけだ。

「おまたせしました」
「じゃ、行こうか」
事務室を出て、通用門へ抜ける。でも、ここの道は正面から右方向は附属幼・小・中に囲まれていて、左方向には池と住宅地と農水学部の放牧地しかない。
戸惑う私を置いて、主任は進んでいく。牛かヤギに用事でもあるのか？
でも、目的地には牛もヤギもいなかった。

連れてこられた先は、神社だった。古い鳥居に板がかかっていてそれに墨でかろうじて読める程度に烏帽子神社と書かれていた。農水学部の放牧地に食い込む形でその神社は建っていた。

「おはようございます。烏帽子様、いらっしゃいますか」
返事はない。朝、早い方でなぁ。もうお出かけかもしれないなぁ。
主任がぼやきながら待つ。
返事がないなら、一度帰ったほうがいいのではないだろうか。
でも、主任は帰る様子はない。
「主任、神社の方に用事なんですか？」
新しい業務内容の検討をつけたいと思って質問したけど、主任は答えず、別の話を始める。
「タマさんは、神様って知ってる？」
「神様ってあの神様ですよね？人並みには…」

世界には動物と人類以外に神族がいる。動物と人類の違いは、直立二足歩行ができること・言語使用・火を含む道具使用等があげられるが、そういった点では神族もほぼ人類と一緒であるらしい。
違いをあげるならば、人類にはない不思議な力があり、その力を使って五穀豊穣や商売繁盛等、祀られた神社で仕事をしているらしいが、完全世襲制で、人前には滅多に出てこず神族の生活は謎に包まれている。学校でならった神族に関する基本を思い出す。

主任はまだ話を続けようとしたが、そこへ男児の声が入ってきた。
「おはようございます。佐々木さん、お待たせしました。あぁ、新しい人が来たんですね」
私を見て何か納得したように主任に話しかける。

上司が様付けで呼ぶその人はどれだけ偉い人なんだと思っていたけど、少年だった。
戸惑っているうちに、次のような紹介をされてさらに驚いた。
「ウチの事務員の環です。次代お世話係として本日は連れてまいりました」
子供の世話係ってなんぞと思ったが、そんな疑問は次の説明でふっとんだ。

「環さん、こちら烏帽子様です。神様だから」
主任、この少年どう見ても中学生ですよ？さらっと流しましたけど、あの神様ですか？こんな簡単に近所に出かけて出会えるはずがない。いろいろ主任に聞きたいけど、とりあえず、後回しだ。

カーディガンのポケットに入れてあった名刺入れを取り出す。
「ご紹介にあずかりました環と申します。よろしくお願い致します」
「あぁ。名刺もらったのは初めてだな。生憎、こちらは持ち合わせていないので失礼します。ここの神社で祀られてます。みんな烏帽子と呼びます。どうぞよろしく」
初めての名刺が珍しいらしくて裏表ひっくり返して見ている様は、宙にさえ浮いていることと外見に似合わない言葉使いさえなければ本当に子供にしか見えない。

「タマさんは、今日から烏帽子様のお世話係ね。烏帽子様は大学をご加護くださっているんだ」
なんだか私の新業務がさらっと告げられたような。業務内容が耳から入って頭で理解できたとき、あれ？名刺差し上げてませんでしたか？私の名刺です。どうぞ。主任は神様に名刺を出していた。
主任、軽すぎですよ！！

顔合わせが済んだところで、烏帽子様が用事の途中だったからと戻っていかれた。
「神様の世話役って何するんですか？」
「う～ん。烏帽子様は結構何でも自分でされる方なんだ。びっくりするくらいフットワーク軽くてねぇ。何かあったら、あちらから仰るよ。それより、社周辺の異常とか敷地にゴミが落ちてたら気にかけて。」

要するに、神社周辺の見回りをすればいいのか。このささやかな神社の見回りで、大学全体の平穏があるならお得だ。幸い、この先の住宅街に私の住むアパートはあるので、朝・夕の通勤時に異変がないか確認しよう。

記念すべき神様初遭遇を果たしたその夜、ＴＶでカレー特集が組まれていた。
名店からＢ級カレーまで幅広く取り扱い、最近は種類が豊富であるナンまでおまけコーナーを作って、ＴＶ画面のこちらまで匂いがきそうな美味しそうな特集だった。
既に夕食を用意していなければと忸怩たる思いを、翌日の学食でぶつけたが、私のカレーを欲する気持ちは学食のおばちゃんのカレーでは治まらなかった。食べ終わっても、私の心はカレーで染められていた。野菜を一杯入れたカレーに少し贅沢して好物の海老を入れて・・・と今晩のメニューが決まりかけた時、横に座った学生がカレーうどんを食べているのを見て、気持ちが揺らいだ。
米もいいけど、うどんも捨てがたいと。

しかし、カレーにはごろごろっとしたジャガイモが必要不可欠というこだわりがあるので、今日の夕飯をカレーうどんにしても、カレー欲は治まらないだろう。ならばどうするか？私はジャガとうどんの共存の道を探した。そして、カレー鍋という存在に行き当たった。しかし、私には鍋は一人でするものではないというこだわりもある。つまり、カレー鍋を食べるには誰かを誘わないといけないのだが、地元を離れ新しい土地で1人暮らしている私には、鍋に誘える程、親しい友人はいなかった。カレー鍋を諦めないといけないのか、こんなに食べたいのに。私の心はもうカレー鍋のものなのに。

そんな私でも仕事はちゃんと済ませた。仲の良い先輩達にお誘いをかけたが、残念ながら用事があるとのことでお断りされた。

最後の希望を失って悲しみにくれたところで烏帽子様に声をかけられた。

「こんばんは。昨日はどうも。お帰りですか？」

余程のことがないと神様には会えないはずなのに、あちらから話しかけて来られて驚いた。

頭の隅で、神様もカレー食べるかな？ほぼ初対面だけど、誘うだけ誘ってみようと考える私がいた。よく話したことのない神様に誘いをかけるほど、その時はカレーに心を持っていかれていた。

「烏帽子様、カレー鍋を知ってますか？」

暗くとぼとぼ歩いてきた私が、いきなりカレー鍋のことを聞いてきたのにびっくりしたのだろう。烏帽子様は少し引き気味だ。

「カ、カレー鍋ですか？名前だけは知ってますけど、ウチでカレー系をすると匂いがついちゃうから食べたことはないんですよね。学食で鍋フェアでもしてくれたらいいんですけど…」

どこか寂しそうに言う烏帽子様。確かに、寂れてるとはいえ神社からカレーの匂いがしてはいけないだろう。手ごたえはあった。

「煮込まれたとろとろの長葱、ホクホクのジャガ、甘みのあるにんじん、プリプリの海老、今の季節ならきのこを入れるのもいいです。全ての具にだしで割ったカレーが絡むのです。そして、締めにうどん。あ、締めはご飯派なら、上にチーズを乗せるのも美味しいんですよ」

そこまで一気に述べて、尋ねる。

「カレー鍋食べたくありませんか？」

しばらくすると烏帽子様の唾を飲み込む音が聞こえた。

その日の夕食は楽しかった。念願叶ってカレー鍋を食べられたこともあるが、久しぶりに1人でない食事が出来たのだ。

謎に包まれている神様ということで緊張していたのだが、意外なことに烏帽子様は庶民派だった。

月毎に変わる学食フェアを楽しみにしていることを語り、大学近くの定食屋の裏メニューまで教えてもらった。色気より食い気の私はとても素敵な情報をもらって感謝した。

「いや、長生きしていると食べることくらいしか楽しみがなくて…」

えへへと照れ笑いしながらビールをグビッと飲む烏帽子様も楽しそうだ。

見た目が中学生なので最初は止めたのだが、私より長生きしているという主張に基づき烏帽子様のアルコール摂取はなされた。

「これっくらいじゃ、酔わないよ」
５００ｍｌ缶３本目に突入しながらケラケラ笑っている烏帽子様は真っ赤だ。
かく言う私もすでに真っ赤になっている。いつもは弱いのでほとんど飲まないのだが、目の前の酔っ払いがしつこくすすめてくるので断りきれなくなり、コップ一杯の付き合い酒でこの有様だ。

続いて、初めて食べたカレー鍋の感想や他に入れたらいいと思われる具材も熱く語り合った。
烏帽子様の熱いカレー鍋に対する意見に、いかに今回のカレー鍋の布陣がベストかを反論したり、提案された新しい具材を検討したり忙しかった。一巡して、最後の具材はジャガイモだ。
「煮込むならメークインだ！！」
「煮崩れより男爵のホクホク感をとったんです。逆に煮崩れがとろみとなり、最後のうどんとの絡みにつながります。私はカレー鍋には男爵がベストだと信じます！！」
「わかった、わかった。でも、君には、冒険心が足りない。アスパラを入れてみてもいいじゃないか。絶対にあうと思う」
「今回は、オーソドックスなカレーをテーマに具材を決めたのですよ？冒険など無用！！」
ダンッと互いにビールが入ったコップをテーブルに置き、むぅーとにらみ合う。
「君がそう言った所で、実際に食べなくては決められないね」

そんな次回持ち越し意見が出されたところで、結局、第２回カレー鍋会を必ず実施することを約束しあい、その日は解散した。自宅の狭い玄関で靴を履いた烏帽子様がしゅっと消えるのを見て、すっかり忘れていたが神様だったのを思い出した。

酔いもさめた翌日、なんとくだらない会話をしたのかと昨夜の醜態を後悔したが、とりあえず、仕事だと神社へ向かった。あちらも昨日の様子を覚えていたようで、2人とも同じような情けない顔でいるのを見れば、お互い自然と笑いが起きた。

「昨日はお邪魔しといてあんなに酔ってしまって申し訳ありませんでした。いつもと勝手が違ったものですから」
「いえ、楽しかったです。2回目は烏帽子様が提案してくれた具材でいきましょう」
「また懲りずに呼んでくれますか？」
「ええ、もちろん。もし、よろしければ、また来ていただけるとうれしいです」

カレー鍋の具材で絡み酒を展開する烏帽子様は、既に神様のありがたみを感じない。それより美味しいものが好きな変な友人という枠に収めた。就職してから初めて友人ができたことが嬉しかった。

2　狛犬

神様の世話係になってから1週間、朝夕に神社見回りをしてみて、見過ごせない点があった。

「草むしりしたいんですけど、都合の悪い日ありませんか？」

ここの神社は、社自体はしっかりしているが、鳥居から社へ続く石段や石畳の隙間から青々とした草が生えているせいで雰囲気が廃墟っぽい。他にも神社を囲む石垣や社周辺にも雑草は蔓延っている。なぜ、こんなになるまで放っておいたと詰め寄りたいが、神様だって忙しいのだろう。正直、面倒だったが、世話係としてむしろうと決意して尋ねた。

幸い、いつでもよい、歓迎すると言われた。

草よ、むしってくれるわ。虫除け、UV対策ばっちりの完全防備の姿で神社の前で仁王立ちする。少しでも気合を入れないと、面倒という気持ちがむくむくと起き上がってくる。

黙々と草むしりをするが、それでも、鳥居周辺の石段と石畳しか終わらない。根深く生えているので、力いっぱい引き抜くと時間がかかる。大きなカブでも生えているのかと思うくらい全身の力を使わないといけなかった。

「はぁ、暑い。10月もそろそろ半ばなのに、日差し強すぎ。風は涼しくなったのに」

ぐちぐちと天気に文句をつける。10月に入っても日中なら半袖でいけてしまう日差しの強さ。きっと南国特有だな。

ずっとしゃがんでいたので足もしびれてきた。立ち上がって腰を伸ばす。ラジオ体操の要領で少し捻りをいれると、バキバキっと骨がなる音がした。
運動不足を実感させるものすごい音で、出した本人だというのに引いてしまった。

「「お姉さん、お疲れ様です」」
後ろから小さな男児達の声がした。烏帽子様とはまた違う声だ。
振り返るとそこには、中型犬サイズの立派なたてがみの獅子と同じくらいの大きさのちょんと角が生えている白い狛犬がいた。狛犬君は尻尾をぶんぶん振って歓迎してくれている。
「獅子の阿と狛犬の吽です。」
狛犬と言えば、ここにも神社の門番として鳥居の辺りにいたなぁと見やると、今は台座だけになっている。

「もしかして、ここの狛犬さん達かしら？」
「はい。お姉さんが、草むしりしてくれてすっきりしたからお礼を言いたくて出てきちゃいました」
まだまだ終わらないけど、労ってもらえるともうひと頑張りと気力がわく。

それに、今はにやにやが止まらない。一人暮らしになり飢えていた動物とのふれあい。しかも！！しかも、どうなっているのかは知らないが、石像でない生身の身体。おまけに意思疎通が図れる。素敵！！
おうおう、つやつや毛並みじゃないですか。たてがみもふもふじゃないですか、触らせてくださいよ。頭なでさせてくださいよ。腕太

い。くはっ、だーきーつーきーてぇー。一瞬にしてセクハラ紛いなことを考えた。悟られたら引かれる。びーくーる。びーくーる。

「環です。なでてもいい？」
わいた気力はとりあえず置いといて、今から休憩時間です。
２匹ともお座りをしてなでやすいようにしてくれた。お利口だ。

草をむしりやすいようにジャージ姿なので抜け毛が付こうが気にせず、まず阿君をなでることにする。
獅子ならきっと猫と一緒だ。猫が気持ちよがるポイントを強弱をつけてなでさする。ここがええんか、ん、ええのんか。と調子に乗っていたら、突然烏帽子様が現れた。

「どこのスケベ親父ですか。ウチからなにか変な気配がするから戻ってきてみれば…」
呆れつつ怒られてしまった。さすが、神様。離れていても私のセクハラな気持ちが伝わってしまいましたか。
「ごめん、久しぶりに動物とふれあえて調子に乗っちゃった」

「主様〜、僕もうダメです。お姉さんから離れられません」
突然、変なことを言い出したのは阿君だ。怒られているので耳が伏せているが、私の足元で身体をくねらせている。実家の猫の為のなでテクでめろめろにしてしまったらしい。

「仕事帰りにしてあげるよ？ 吽君もずっと座りっぱで暇でしょ。一緒にお散歩行く？」
怒られてる最中だったけど、あんまりにもかわいいのでぽろりと言ってしまった。

目を輝かせる阿・吽君とは反対に烏帽子様は渋い顔をする。
「ダメですよ。これから冬に向けて寒くなるし、暗くなる時間も早くなるんですから。女性が遅くなるものではありません。だいたい吽は角生えてるのを見られたらどうするつもりですか」
「でも、主様とは全然手つきが違うのです。この方じゃないと嫌です」

阿君、それは飼い主の心を抉る一言だよ。言っちゃダメだよ。ほら、烏帽子様もショックを受けてるよ。
「お前とは２００年一緒に暮らしてきたのに…。そんなに環さんがいいなら、環さんちの子になっちゃいなさい」
えぇー、何その台詞。２００歳以上の神様の拗ね方としてはどうなの？
でも、これ以上こじれる前にちゃんと言わなきゃな。
「ウチはペット不可なんで引き取りはお断りです」
「「……」」
え、なぜ烏帽子様と阿君は黙っちゃうのさ？

この混沌とした空気を治めたのは、ずっと黙っていた吽君だった。
「では、こうしましょう。どうせ主様は日が暮れると帰ってこられるのですから、環様にはお仕事帰りに寄ってもらい、阿を心いくまでかわいがってもらう。そして、僕を散歩がてら主様が環様を送っていかれればいいのです」
おお、私の希望も阿君の希望を叶えつつ、ちゃっかり吽君の希望も叶う素敵な提案だ。ただ問題は、忙しいはずの烏帽子様が諾としてくれるかだ。

3人（1人と2匹）のきらきらした視線が烏帽子様に集中する。しばらく悩んでいたようだが
「夜はすることがないですし、いいでしょう。その代わり、これからも阿・吽は留守番をしっかりしてください」
と言ってくれた。
「「主様ありがとうございます」」
阿・吽君があっという間に烏帽子様に群がる。やはり飼い主には勝てない。

「環さんもウチの子達をかわいがってくださるのは嬉しいですけど、ご自分のことも気をつけないといけませんよ」
「烏帽子様、ありがとう。あまり遅くならないようにするけどよろしくね」
そういったところで、2時限目終了のチャイムが鳴っているのが聞こえた。
「あら、お昼だ。午後は事務室で仕事なんで、社のほうはまた明日の午前中に。じゃあ、また」
抜いた雑草を集めておいたゴミ袋を持って事務室へ戻ろうとする。

「あ、ちょっと待ってください」
烏帽子様から引き止められた。烏帽子様は社の中に入って、また出てきた。あの中どうなっているんだろう。人の家を覗くなんて普通はしないけれど、居住スペースとしては不十分な広さしかなさそうな社を見ていると気になって仕方がない。

「環さん、これ。今日のお礼です。今日していただいた分だけでも、随分すっきりとして見栄えがよくなりました。暑い中、ありがとうございました」
にっこり笑って差し出されたのは、市販のアイスティーと焼き菓子

だった。受け取ったアイスティーはよく冷えている。わざわざ用意していてくれていたようだ。

「うわぁ、ありがとうございます。早速お昼にいただきます」

烏帽子様と阿・吽君が鳥居のところで見送ってくれる。

「「またね」」

君らは双子か！？シンクロかわいいなぁ。

予想外のお礼と狛犬達のかわいさに励まされて明日の草むしりも頑張ろうと固く決意をする。

その決意は、翌日にきた全身筋肉痛のせいで脆くも崩れ去ることになる。

3　約束

「来月は大仕事があるからねぇ。体力作りしておいて」
主任から１０月に入った頃言われたことだ。
「はい」
とりあえず、返事はしたものの、はて、キャンパス案内や教育実習の影響で一番後期が始まるのが遅かった教育学部でさえ受講登録は既に終了、入試にいたってはもう少し先、１１月に一体なんの大仕事がと疑問顔の私に先輩が教えてくれた。
なんでも、徹夜でハメを外しすぎた集団酔っ払いを止める仕事が来月待っているらしい。
端的過ぎて要領を得なかった私はもう少し詳細を求めた。

我が大学（しょくば）は、総合大学として、学生だけで１学年約２０００人が毎年入学する。それが４学年。もちろん院生や留学生も毎年１１月初旬に行われる大学祭には参加をするので、学祭といえども、約９００人規模のお祭りになる。６年制の医・歯・薬学部が別キャンパスになっていなければ、１万人を超えていただろう。
期間も会場設営準備から後片付けまでいれると約４日間と長い。
近隣の小・中学校から運動会などで使うテントを借りてきて、その周囲をブルーシートで囲み簡易屋台を制作。そして、夜間はガスボンベやコンロ、そして借りてきたテントそのものの盗難に備えて当番で泊り込みをする。
・・・というのは建前で、夜はみんなテントを寝床とし酒を飲みハメを外し大盛り上がり、一部では昼の屋台とは違った夜用メニューも存在。昼は一般客、夜は学生客を相手とし、本祭の３日間は止まることなく続く。
日中の学祭は、大変活気があって屋台も物珍しいものがあり、見て

いるだけでも楽しい。しかし、夜間はハメを外した一部の馬鹿共(がくせい)が急性アル中で運ばれたり、酔っ払いが暴れて学舎の備品を壊したりとやりたい放題になる。
近年は、あまりのアルコールトラブルに大学側がアルコール管理の徹底や電気供給時間の短縮を学生側に通告したが、それでもＯＢ・ＯＧの出入りもあり慣習として夜間のどんちゃん騒ぎは続いている。
その為、大学事務職員が定期的に見回りをし、行き過ぎた騒ぎを止めるように3年前から見回り隊を組んでいる。
一部がくせいの発音に力を込めた先輩にそこまで詳細に説明してもらい私は納得した。

つまり、徹夜でハメを外しすぎた集団酔っ払いを止める仕事が来月待っているというどうしようもない事実を。
１１月に向けて気が重くなったのは言うまでもない。

烏帽子様に吽君の散歩も兼ねて自宅まで送ってもらうようになってから、２週間。もう１１月は目前だ。
草むしりも終えすっきりした境内は広くなり、烏帽子様の好意で上司命令の体力づくりの運動に使わせてもらっている。

「烏帽子様は大学祭に行ったことある？」
先輩から話を聞いて漠然と大変そうだという感想はあっても、体力づくりまでしなければならない大学祭の想像がつかない。

「ええ、あります。ちなみに、おススメは留学生の方がされる屋台です。毎年お国が違う方が指揮をとられるみたいで、日本では食べられないような美味しいものが見つかりますよ。ただそのように変わった屋台や催しがあるので、それを目当てとしたお客様も多いよ

うですね」
珍しい屋台があるとは聞いていたけれど、留学生の屋台ね。チェック入れとこう。

「烏帽子様は常連さんですか？」
「こんなに近くに住んでますからね、楽しいものには参加しなくちゃ。環さんも一緒に行きますか？案内しますよ」
「いいの！？烏帽子様に案内してもらえるなら美味しいとこチェックできる～。お願いします！！」
「3日間ありますけど、いつにしますか？最終日は売り切れの恐れもあるので、私としては初日か2日目に回りたいです」
わざわざ売り切れの心配をするなんて、きっと経験があるんだろうな。完売の札を前にして、がっかりしている烏帽子様が浮かぶ。

私には2日目の夜に見回り当番がある。日中は徹夜に備えて休みたい。
「それなら、初日がいい」
「では、11時頃にここに集合でいいですか？」
「いいとも～！！」
烏帽子様にふふって笑われた。
「環さんは美味しいものになると反応が違いますね」

はっと気がついた。楽しみだけど、屋台巡りの約束してる場合じゃない。

改めて、夜間の様子を聞いてみる。
「そうですね、連休を利用して行いますから、全国各地から卒業生の方が顔を出されるみたいで親睦会をしています。契約で大学守護

が入っているので見守っていますが、人死を出さないように毎年大変なのですよ」

烏帽子様は苦笑いで言うけれど、人死が出るかもしれない大学祭に私は怯えた。

「環さんは初めてでしょう？驚くでしょうけれど、今年は私と佐々木さんと環さんで見回ると聞いています。私が何もないように守りますから心配ないですよ」

烏帽子様、なんだか胸がきゅんとしました。たとえ声変わりしてない男児からでもそんなことを言われると嬉しいものです。

「ただ夜間は構内を裸で歩いている人がいても普通だと覚えていてくださいね。下手をするとそういった方が集団で歩いている場合もありますから。念のため蘇生法も覚えておいてください」

烏帽子様、それは本当に大学祭の話ですか？

…予想以上に激しい大学祭が私を待っているようだ。

烏帽子様が質の悪い冗談を言うとも思えなかったので、構内のＡＥＤの設置場所と教習所の教科書に載っていた挿絵付き心肺蘇生法を夜な夜な枕相手に復習すれば、１週間はあっという間に過ぎた。

大学祭終了後にはこのことが笑い話になるように、自分を含めみんなが怪我なく無事に過ごせるようにと、大学祭を明日に控え、烏帽子神社にやってきた。

神社で作業をするときには挨拶代わりに参拝するようにしていたが、願掛けは初めてだ。

二礼二拍手一礼。最後によろしくお願いします。心の中でそう結べば「よろしくされました」

後ろから烏帽子様が現れた。

願掛けなのだから、烏帽子様にも届いているだろうけれど、なんだか見られたのは恥ずかしい。

「ところで、佐々木さんが探していましたよ」

密かに照れている私には気づかないまま、烏帽子様は主任からの伝言を教えてくれた。

一日がかりで植物園や図書館のガラスが割られてしまわないようベニヤ板やガムテを貼り終わり、今日の仕事は終了とここまで来たのだが、実は未開放区域へ立ち入りされないようにバリケードを築く作業が全講義終了後にあったらしい。朝の伝達の途中で、備品を取りに来た学生の対応した為、そこの部分を聞き逃してしまったのだろう。

慌てて戻る。

「伝言ありがとう」

「いいえ。頑張ってください。明日１１時に会いましょう」

烏帽子様は笑って手を振ってくれた。

4　大学祭

昨日と見る景色は変わらないはずなのに、今日から１１月という事実が見るもの何もかもを秋と感じさせる。澄み切った空や黄葉を始めたイチョウ並木を眺めながら自宅から烏帽子神社まで１０分ほど歩いてきた。

同じ道をちらほら大学へ向かう学生達がいたので、鳥居のところにいる男性を見ても、誰かと待ち合わせをしているのだと気にならなかった。
それでも、知らない人と同じところで待つのは嫌だったので、すれ違う際に目が合った男性に会釈をして、社のほうへ石段を登る。なのに、男性もついてきた。それだけでなく、声までかけてきた。

「おはようございます。環さん」
なぜ私の名前を知っている。誰だ？思い出すまで頑張れ、私。
「おはようございます」
「今日は楽しみましょうね。とりあえず、おススメの留学生屋台に最初に行きましょうか」
テンション高いな。ん？なんか一緒に屋台を回ることになっているけど、ナンパ？
…おススメの留学生屋台？ん？んー、顔の系統が待ち人に似ていることに気がついた。
「もしかすると、烏帽子様のご家族ですか？」
「え？いやだなぁ、環さん。烏帽子ですよ」
「え？」

烏帽子様って、だいたい中1くらいの紳士よね？なぜ、三十路手前くらいの貴方が烏帽子様なのだ。
「環様、この方は主様で間違いありません」
フォローをくれたのは吽君だ。男性を避けて石段の端を登っていたので、声をかけられたときにちょうど吽君の前にいたのだ。
「主様も、普通はいきなり成長したら別人だと思われるのですよ。しっかり環様に説明してあげてください」
確かに、説明してください。

「環さんは、神無月って知ってますか？」
「出雲地方に神様大集合で、それ以外の地域は留守になってしまうからついた陰暦の１０月のことですよね」
「そうです。最近は人に合わせて新暦で集まるようになりまして、１０月中は出雲に出張していました。でも、ウチはご神体の都合上、完全に留守にするわけにもいかないので、留守番を作って置いていたのです。恒例なので、佐々木さんから説明を受けていると思っていたのですけれど、驚かせたみたいですみません。あ、お土産があるので帰りに渡しますね」

わざわざ買ってきてくれたのは嬉しいが、今は最後の一文を無視して考える。
「えっと、では、あの少年烏帽子様は分身みたいなもので、貴方が本体ということですか？」
まだ男性を烏帽子様とは思えず混乱していたので、失礼な言葉を使ってしまった。

「本体といえば、本体です」
何度か見たことのある苦笑いを披露してくれた。それを見てやっと

少年の烏帽子様がこの人なんだと分かった。不思議な感じだ。いつも私の肩の位置で合わせていた視線が、上向きになる。
男児なら平気なのに男性と意識してしまえば、緊張する。

「環さん。どうしましたか？」
「文系だったおかげで高校の頃から男性と話す機会が極端に減りまして、お恥ずかしい話ですが、大人の烏帽子様に緊張しています。そのうち慣れると思いますから、心配しないでください」
タメ語でいいよと言ってもらったので、今までそれで通していたのに、急に丁寧に話し出したらそりゃ気になるだろう。神様に隠し事をしても仕方がない。素直に緊張していることを告げる。
「一緒に鍋をしたり、吽を散歩させながらお話をしたではありませんか。ふふ。中身は変わりませんよ。さぁ、行きましょうか」

中身は一緒と呪文を唱えるが顔は赤いまま、狛犬達に見送られ大学まで歩く。
神社から一番近い通用門から大学に入るが、喧騒は聞こえても屋台が見当たらない。私がきょろきょろしているので、烏帽子様が説明してくれた。

「屋台は、学食前の大通りを中心にでているので、第2体育館を過ぎないと見えないと思います。留学生屋台は正門の広場で出ていますので、下見も兼ねて大通りを突っ切って行きましょう」
烏帽子様の提案を受け入れたことを後悔したのはそれからすぐだった。

「あ、烏帽子様だ。彼女ですか？」
何度目だ。やめろ、顔が赤いのが治まらないだろ。というか、みん

な神様相手にフレンドリーだな。
「違いますよ。友達です。またあとで来ますね」
烏帽子様はいろいろな屋台から同じ内容を話かけてくる知り合いに会うたび同じことを言って手を振り進んでいく。大通りは、一つでも多く売ろうと売り子や、屋台に立ち止まる老若男女のお客さんでごった返していたが、烏帽子様の後ろについていけばものすごい混雑だったのに誰にもぶつかることなく目的地の広場につくことが出来た。

「あ、あった。毎年同じところに出してくれるから、探さなくてもよいので楽です」
広場には、買ったものが飲食できるようにフードスペースも設けてあり、その奥に目的の屋台は出ていた。

屋台にいろいろな国旗が飾られており、一番目立っていたのは日の丸と中国の国旗だった。
「それぞれの出身国の旗が飾ってあるんでしょうね。全部の国名は分からないですけど、アジア圏が多いですね」
手書きの品札を見ると、メインは中華のようだった。

「何年か前にここで出された中華ちまきは絶品でした。また美味しいちまき食べられるかなぁ」
烏帽子様の希望通り中華ちまきもあったので、2人で並んで購入して飲茶する。
出来立てほかほかの中華ちまきを、アチアチしながらタコ糸を取り竹の皮を剥がす。
もち米で作られたちまきは、見るからにもちもちとして蒸気でつやつやと光っていた。食べると、出汁をよく吸った米の旨みが広がり、

口から鼻へ香りが抜けていく。また鶏肉が大き目なのも嬉しい。

「美味しい！！」

美味しすぎてびっくりした。烏帽子様からおススメと言われても、学生屋台だからと少し穿った目で見ていたのが申し訳なかった。

「でしょう！！また学祭期間限定なのが憎らしいのですよ」

同じように食べてニコニコしている烏帽子様が言う。

「いや～、それを言わないで」

「それもまた来年の楽しみですけれどね」

自分の分を食べ終わってもまだニコニコしてこちらを見ている烏帽子様に疑問を覚えて聞いてみる。

「言葉遣い、元に戻りましたね」

はっ、美味しいものってすごいな。緊張が飛んでいった。

遅れつつも大満足で食べ終わると烏帽子様が

「実は、友人からそれぞれ食券をもらいました。3日間で順番に回ろうと思うのですが、この中で食べたいものがありますか？」

うどん・そば、サータアンダーギー、焼き鳥、カレー、たい焼き、パイ、ポテト、おでん、じゃがバターと色とりどりの食券が現れた。書いてある店名はひとつとして同じものはない。学生でない烏帽子様がどうやってこんなに知り合いができたんだろう。不思議だ。

「どうしてこんなに学生に知り合いがいるの？」

「朝のうちは、附属校の方の交通安全指導とか大学巡回をしているのですが、午後は空いている時間があれば、面白そうな講義を受けたりしてるのです。そこで知り合いました」

そんなことをしていたのか。

「もともとはウチの近くに面白そうなものが出来たなぁとここにもぐりこんでいたのですが、あるときばれてしまって、それで当時の学長と話しまして、大学を守ってくれたら自由にしてもいいよって条件をつけられちゃって。お金を払わずに講義を受けていた弱みもありましたしね。それで今に至ります」
「前々から思ってたんだけど、大学を守るって贔屓みたいな感じで、神族のほうから咎められたりしないの？」
烏帽子様がどうして大学守護をしているのか理由が聞けたので、思わず日頃の疑問もぶつけてしまった。

「まぁ、守るといっても、怪我をしにくくなるとかそういう類なんです。就職が１００％うまくいくとかの特別贔屓はしていませんから、氏子を見守るということで多めに見てもらっています」
へぇ、例の出雲の神様会議で報告したのかな。
「まあそんなところです」
「聞かせていただいてありがとうございました。あとここに行ってみたいです」
話を聞くきっかけになった食券の中から行きたい先を選ぶ。
「いいでしょう。行きましょうか」

その後は、屋台中心といっても胃の限界があり、消化を助けるためにひたすら大学構内を歩いた。
参加型展示系を覗けば、理工学部ではダイラタンシー現象が体験できる公開実験教室が行われていたり、馬術部が乗馬教室を開いていたりと飽きることはなかった。
珍しい体験ができたと言うのもあるが、片栗粉の上で一生懸命足踏みをし続けたり、久々に馬に乗ると興奮気味だったりする烏帽子様を見ているだけで楽しかったというのが大きい。

「いや～、楽しかったですね。環さんのおかげで男一人だとなかなか参加しにくくて、今まで遠慮していたのにも行けました」
「こちらこそ。まさか大学祭で新鮮お野菜と産みたて卵をあんなに激安で手に入れられるとは。そのうえ、荷物まで持ってもらっちゃって。今度、何か作ってきますね」

畜産科&農耕科侮りがたし。もともと営利目的で作っていないものを大学祭でさばくのだ。その上、人件費もない。大部分の学生と同じように彼らも、売り上げから学祭打ち上げ費用と学科の1年分懇親会費用が手に入ればいいのだから、無人販売所並みの安さから値引きされる野菜が続出した。

少し怖かったが、その安さには勝てず、マダム達が目の色変えて買い物をしている中に混ざってきた。袋では入りきらず用意された空きダンボールに野菜を詰めて帰るマダム達のまぶしさったらなかった。
そんな私も、戦利品は烏帽子様が抱えてくれている。サツマイモやたまねぎなどの詰め放題にチャレンジしてしまったのが原因で、重たくて腕が千切れそうになっているのを見かねた烏帽子様が持ってくれた。

日が暮れ、薄暗くなった道を自宅へ送ってもらう。
「そろそろ見回りの集合時間ですね」
夜が近づいてくる。暗くなっていく私を見かねたのか
「明日はちゃんと守りますから大丈夫ですよ」
烏帽子様は1週間前に言ったことをもう一度言ってくれた。

違うのは、言った烏帽子様が中1サイズではなく私より年上の男の人ということだ。

返事ができなくて黙っている私に重ねてもう一度。

「大丈夫ですよ」

安心させるように肩をポンっと叩いてくれた。その手の暖かさと大きさは烏帽子様の目的通り、私をちゃんと安心させてくれた。…顔を赤くさせるつもりはなかっただろうけど。夕暮れ時でよかった。いつの間にかアパートの前に着いた。照れ隠しにさっき買っていた物を渡す。

「あ、これ阿・吽君にお土産です。畜産科特製ジャーキーです。塩分控えめに作ったって言ってました。今日はありがとうございました」

ペコリと頭を下げてウチに逃げ帰った。感じ悪かったな…。

5　見回り

すでに２１時をまわり電力供給時間が終了したのになぜか明るい構内には、どこを向いても酒臭いとしか言えない状態だった。

２１時を過ぎれば暗くなると思っていたが、ランタンや、古参サークルなどは発電機まで用意して電力供給時間終了後の明かりを確保し、夜通し飲み明かそうとしているらしい。一体、君達はどこへ向かおうとしているのか。そこまで酒好きではない私としては、彼らの情熱が理解できない。

手には懐中電灯を、私服の上に蛍光イエローの大学事務ジャンバーを羽織り、主任と烏帽子様は私を挟みながら歩いている。先輩や烏帽子様から話を聞きつつ、夜間の大学祭とは歓楽街のような感じではないのかと考えていた私は、甘かった。

先ほど、裸の男子学生をご神体様じゃー、神輿じゃーと叫びながら担ぐ２０人程の集団にかち合ったときにそんなことを思った。

「今回はおとなしいですねぇ」

「ええ、本当に」

私の頭越しにそんな話がなされているが、信じられない。止めなくてよかったんだろうか？止めるのが、今日の仕事なんじゃないのか？

「止めなくてよかったんですか？」

「止める基本は、器物損壊・暴行・性犯罪・事故につながりそうなことをしているときかなぁ。さっきのはひっかからなかったよ」

「主任、普通、屋外で全裸は性犯罪ですよ？」

あって顔した！！

「ふふ、大学祭中の全裸なんて普通すぎて忘れていました」

烏帽子様、爽やかに笑ってもフォローになっていないです。

1時間かけて、運動系サークル棟からS字を描くように構内の1回目の見回りが終わらせ、大学事務室へ戻る。時折、遠くで雄叫びが上がったり、なぜか太鼓を叩く音が鳴り響いていたりしたが、すれ違う学生は、みな酔っ払っているけれど暴れたりはしていなかった。今はまだ宵の口だそうで、これからが大変らしい。

「まだ11月だから凍死の心配はないけど、路上で寝ている学生さんとか、飲み歩き中にはぐれてしまった女子も出てくるし、とにかく見つけたら保護で。とりあえず、休憩しましょう」

緊急時に鍵が必要になることもあるので、大学祭中は鍵当番が置かれる。3年前からは見回り当番も出来たため、1度見回りを終えたら事務室に帰り鍵当番と交代というスタイルになっている。鍵当番は、夜間は男性だけだったのだが、見回りもとなると人数が足りないので、私のように女性も当番に入り、負担の多かった男性がより休憩を取れるようにした。

トランシーバーやジャンバーを脱ぎ、コーヒーを入れる。主任は携帯をチェックすると電話のため奥へ移動した。

「お疲れ様でした。はい、コーヒー」

砂糖とミルクはセルフでお願いします。事務室の隅にある応接セットのソファーに座った烏帽子様にコーヒーを差し出す。テーブルの上には籠に入れたスティックシュガーとコーヒークリームを乗せた。

「ありがとうございます」
そのときだった。主任の焦るような声が聞こえてきた。

「まだ予定日まで1ヶ月もあるじゃないですか。大丈夫なんですか！！」
主任の言う予定日とは、きっと奥さんの出産予定日のことだろう。
初子ということで、まだ生まれる前から奥さんの惚気と共に色々聞かされてきた。何があったのだろう。
「どうしたのかな？」
不安に思い、烏帽子様に話しかけてみる。でも、烏帽子様は先ほどまで座っていたソファーにはもういなかった。

「佐々木さん、こちらは私達に任せて行ってください」
電話している主任に話しかけている。
「いや、しかし・・・」
「見回りは2人で大丈夫です。任せてください」
神様に任せてくださいって言われたら、逆らえないよね。

「…本当にありがとうございます。でも、課長に相談をいれてから」
まだ続いていた電話に何か二言三言伝えてから、課長へ電話をかけなおす。
「タマさん、課長が代わってって。はい」
いつも通りの口調だが、顔が真っ青な主任から、状況が掴めないまま電話を代わる。

「代わりました、環です」
「あ、お疲れ様。タマさん、佐々木君の奥さんが救急車で運ばれたということで、今日は烏帽子様と一緒に見回り、鍵当番してください。初めての学祭で戸惑うこともあるだろうけど、明日もあるのでこれ以上の変更は難しいので、よろしく頼むよ」

主任の奥さんが救急車で運ばれたくだりで驚いたが、課長に告げられた内容はもっと驚いた。でも、主任の奥さんは県外出身で親戚はそばにいないって聞いてる。今、傍にいられるのは主任しかいないんだ。

誰にだって初めてはあるのだ。まだ烏帽子様が一緒についてもらえるだけいい方だ。

迷いはしたが、私が出来る返事はひとつ。

「はい。わかりました」

お願いしますの意を込めて、見つめてくる烏帽子様にうなずく。

「本当に申し訳ありません、どうぞよろしくお願い致します」

主任は早く病院へ行きたいだろうに何度も頭を下げて出て行った。

二人で事務室から見送ってドアを閉める。

「佐々木さんの奥さんって身体が弱いらしいです。変事があったんだなって思ったら傍についていてほしくて。環さんには悪いことをしましたね」

「いいです。いつまでも新人でいるわけにはいきません。1回目の見回りはしましたし、私達でなんとかしましょう。それよりも烏帽子様にはご迷惑をおかけします」

守護してくれているとはいえ、事務の仕事を手伝ってもらっているのだ。主任が抜けたことで、力仕事は、烏帽子様がメインになってしまう。

「…環さん、私が大学でどのような位置にいるか知らないでしょう？」

「へ？」

「私も一応は大学事務に籍を置いているんですよ？自分の仕事をするだけで迷惑と言うことはありませんよ」
「えぇ！！先輩だったの！！」

神様の世話係というのも非現実的だが、神様が同僚というのはもっと非現実的だろう。
驚いた私を見て満足したのだろう。烏帽子様のにやりとした人の悪い笑みを浮かべた。
悪い顔するの初めて見た。

戻ってきた別班に、事情を説明して、見回りに出る。
「暴れているわけでもないんだが、白衣の集団が黙々と正門へ向かって歩いていてなぁ。ちょっと不気味だったな」
戻ってきた先輩達が口々に見回り中に見た注意人物を教えてくれる。
気をつけてと先輩達は疲労を滲ませていた。今回の見回りは、苦労したらしい。

「行きますよ」
昨日の昼、烏帽子様と通った屋台大通りは、全く様相を呈していた。
屋台の裏側から聞こえてくる嘔吐する音。酒瓶を持ってふらふら歩いている男子学生。テントから聞こえる駆けつけ三杯コール。酔っ払いに慣れていない私には何もかもが恐ろしい。さっきの、なんとかしようという決意はあっという間にしぼんでいった。
尻込みをしていると、後ろからざっざっという何かが規則正しく歩く音が聞こえる。
振り向けば、先輩達が教えてくれた不気味★白衣集団が歩いている

のが見えた。
知り合いと目が合ったらしい烏帽子様が会釈をしている。シュールな光景だ。

「さあ、背筋はちゃんと伸ばして。大学事務の監督する立場であることを忘れないでください。私の後ろで怯えていたら余計に絡まれますよ」
後ろから肩を叩かれる。昨日は心強く支えてくれた手が、今は恐怖を煽るものでしかなかった。

「環さん、あそこに倒れている子がいますよ」
怯えを隠せない私に業を煮やした烏帽子様は後ろから見守っていますと言いつつ、指示を出してくる。おっとりしているくせに意外と人使いが荒い。

烏帽子様は、早く行けと言わんばかりにくるくると懐中電灯で倒れている学生を照らす。ええ、急かされなくとも行きますよ。小走りですよ。

「呼吸は正常ですね。ものすごく酒臭いです」
「寝ているだけですかね。一応保護しますか」
烏帽子様が寝ている学生に腕を差込み、肩に担ぐ。一輪車に乗せて毛布をかけてやる。

「戻ります」
「はい」
行き倒れの酔っ払いが多すぎる。いつも穏やかな烏帽子様が疲れを隠さないでいるくらいには、このやりとりは繰り返された。

所属がわかるようにサークル名・学科名が書かれた法被やつなぎやトレーナーを身につけるようにと指示が出ているため、身元確認は簡単だ。一度、事務で保護し異常を確認した後、引き取りにくるようにテントへ連絡を入れる。きゃっちあんどりりーすって主任は笑っていた。

「よっこいせ」
一輪車を持ち上げて、バランスをとりながら進む。
「烏帽子様、よっこいせはまだ若いんだから言わない方が」
「環さん、私は２５０歳くらいですよ。もう十分おじいちゃんなのです」
そういえば、阿君と２００年一緒に暮らしたって言ってたな。見た目は若いのに。

「烏帽子様は江戸時代生まれなんですか？」
「そうですね。ウチを継いだのは、１５０年くらい前かなぁ。あの頃は、開国だの何だので忙しなかったです」
懐かしがっているけれど、いろいろ突っ込みたい。

「ウチを継ぐ？」
「私は二代目ですよ。親が初代で、代替わりしたから。親は仕事で今まで神社からあまり離れられなかったから、キャンピングカー買って初代狛犬達と一緒に全国放浪の旅に出ています」
「…楽しそうですね。はは」
烏帽子様への神様としての敬意はもうなかったのだが、他の神族までありがたみが一挙に薄れてしまった。
「だいたい巡回ルートは見終わりましたから、この子が最後でいいでしょう。戻ったら交代しましょう」
大学事務室が入っている建物が見えてきた。

２回目の見回りに出たのが、１１時半。終えたのが1時。別班の見回りが戻ってくれば今日の仕事は終わりだ。
保護していた酔っ払い達も順次引き取りが来ていた。
「お酒はほどほどにね」
「すみません」
と私達が連れてきた男子学生も頭を下げて自分でテントへ戻っていった。
喧騒の中から自分のホームベースに戻って来られてほっとした。
「おつかれ」
烏帽子様が入れてくれた本日2杯目のコーヒーをグビッと飲む。
遠くでロケット花火が鳴る音が聞こえた。…まだまだ気は抜けない。

6　山

「ただいま。はぁー、疲れた」
事務室のドアが開く。別班が帰ってきたようだ。
「おかえりなさい。お疲れ様でした」
「おぉ、最後に一人連れてきた」

先輩が千鳥足の学生を隅に連れて行って座らせる。保護した学生を休ませるために、事務室の隅には備品の体操マットと毛布を敷いている。そこに学生はそのままくたっと身体が崩れて毛布の上に倒れこむ。ご他聞にもれず、彼も充分酒臭い。

「今日はこれで終わりだ。まあもう3時だし、だいたい静かになっていたよ。あとは朝まで鍵担当が残るだけなんだが、今日の当番誰だっけ？」
ホワイトボードに書かれた当番は、主任だった。

「あちゃー。しまったなぁ」
「私が代わりますよ。佐々木さんには任せろと言ってありますから」
「いいですか？いや、あとの2人は医療キャンパスから手伝いに来てもらっているし、俺は今夜もあるしで助かりますけど」
「構いませんよ」

「お疲れ様です」
話がまとまった瞬間に、巡回ジャンバーを脱ぎ片付けると、先輩達は素早く帰っていった。大変だったんだろうな。

私も帰ろうとすると、烏帽子様に止められた。
「女性の単独行動はダメです。送っていきます。眠いのなら、あちらのソファーで休んでいてください」
なに、まだ帰れないのか。先輩達について正門から回っていけばよかった。
こうなった以上疲れているはずの烏帽子様を働かせて、一人休めない。泣く泣くカウンターに座った烏帽子様と並ぶ。

二人で見事な朝焼けを眺めて眠気を覚ましたりしながら朝5時を過ぎた頃だった。
「すみません、うちのテントで盗難があったようなんです。どうもうちの周辺は軒並みやられたみたいで…。今から、警察に届ける予定です。お手数ですが、一緒に来てもらえませんか？」
そう言ってとあるサークルの代表者が現れた。

寝入ってしまったテント当番の荷物を狙って置引きが発生することもあるらしい。悲しいことに、今年はそれが発生してしまったようだ。
警察立会いなら、やはり私より男性の烏帽子様のほうが何かと都合がいいだろう。なにより、代表者さんの目線は、私ではなく烏帽子様に向かっている。

先ほど奥で眠っている学生さんの様子も落ち着いているのが確認できたし、ここは私一人でも大丈夫だろう。烏帽子様も同様に考えたらしい。
「環さん、ここをお願いします」
ジャンバーを羽織って出かけていった。

ううんという唸り声が後ろから聞こえてきた。保護している学生からだった。
身体をくの字に曲げて顔をお腹の方に伏せている状態だったので、呼吸を確認しようと顔を覗き込む。すると、うっすらと開いている目とあった。
「おはよう、起きた？」
と聞くつもりだったのだが、腕をぐいっと取られると抱き枕のように抱き込まれた。
その間、３秒くらいだったのではないだろうか。早業だ。

私が言えたことは
「へひゃ！！え？ちょ！！」
だけだった。抵抗する前に足は絡められ、右腕一本で抱きしめられて身動きが取れない。もともと倒れこんだ状態でバランスも悪く、こんなことは初めてだったのでガッチリ固まってしまった。
彼は顔を私の胸にうずめてきて、一人で幸せそうだ。なんだか、女の子の名前を呟いている。
「人違い！！人違いだから！！放して！！」
私のその声を聞いて、寝ぼけてぼんやりとした目が私の顔に焦点を合わせてきた。
視線があった途端、びくっとして視線をまた下げて状況を確認しようとした。

そのとき、外から何かが走ってくる音が聞こえた。ばたんとドアが開けば、烏帽子様だった。
あんなに恐ろしい顔をしている烏帽子様を見たのは後にも先にもあのときだけだった。今になれば振り返る余裕もあるが、その時は初めて襲われてテンパっている状態で、押し倒されているのを知り合

いに見られたのだ。
涙目になった。

それがなおさらまずかったのだろうが、
「何をしている！！」
同時にどおんと何かが爆発するような音が聞こえて窓ガラスを揺すった。
ビリビリと鳴るガラスには構わず、烏帽子様は走り寄ってきて私を男子学生の腕の中から助け出すと、背中側から蹴りを一発いれてうつぶせにし取り押さえた。
「環！！大丈夫か！？」
腰が抜けて座り込んでいるが、大丈夫と返せば
「とりあえず、話を聞きましょう」
烏帽子様の冷たい声が聞こえた。体重をかけ強く押さえ込んでいるようで、学生からは苦しそうなうめき声しか聞こえない。

先ほどまで朝日が差し込んできて明るくなっていた空が真っ暗なことに気がついた。よく見れば、この県のシンボルとも言えるお山さんが噴火しているのが見えた。さっき何かが爆発するような音はこれだったんだ。入道雲のようなもくもくとした噴煙があがっていたが、風向きがこちらだったようで天辺付近の噴煙が流れてきている。もう今日の大学祭は降灰のせいでじゃりじゃりだなと妙に冷静に考える。灰袋を用意しなくちゃいけないかな。
そんなことを考えていたら抜けていた腰も平気になった。

すっかり目が覚めた男子学生は、烏帽子様から解放されるなり私に向かって土下座をしてきた。
「本当に申し訳ありませんでした。こんな朝早くから会うのって彼

女くらいで、髪形とか色が似てたから…。何を言っても許されないと思いますが、本当に申し訳ありません」
びしっとした綺麗な土下座だった。
「…もういいです。念のため彼女の名前を言ってください。あと貴方の学部名と名前を教えてください。次はないですよ」
彼が寝ぼけていった言葉でだいたいの事情は分かっていたのだ。あの時言った彼女の名前と彼が言う名前が合えば、嘘はないだろう。
そして、合っていた。
「もう目が覚めたでしょう。帰りなさい」
押し出すように事務室から出て行かせる。ドアを閉じれば、その場にずるずるとしゃがみこみたくなった。

でも、後ろに一人残っている。烏帽子様にちゃんとお礼を言わないと。
烏帽子様へ振り向くと、電話が鳴った。
「で、でます」
なぜか宣言してからとると主任からだった。

「タマさん!?烏帽子様に何があった?」
いや、烏帽子様には何もなかったですヨ。それにしてもこのタイミングでとは主任も勘がいい。
はっきり言えば、あんなこと言いたくない。でも、報告しないわけにもいかないだろう。せめて直接報告しよう。
「…あとで報告したいことはありますが、烏帽子様には何もありませんでした。ご本人に代わりましょうか」
お、受話器むしりとられた。
「烏帽子です。はい。ええ。大丈夫です。すぐに治まります。心配させてしまい申し訳ありません」
がしゃり。乱暴に受話器が置かれた。烏帽子様がお怒りになってお

られる。男性と話す機会が全くなかった私としては、直接向けられた怒気ではないにしろ一緒にいるのは怖い。
助けてもらっといてなんだけど。

はぁぁぁぁ。深いため息ですね。そうですよね、疲れているところにご迷惑をおかけしてすみません。
「あぁ、やってしまった…」
えらく落ち込んでいる。
「何を？」
じっと私を見つめてくる烏帽子様。何かついてますか。
「申し訳ない。約束したのに、守れませんでした」
「さっきの？あれは驚いたけど、襲うというよりも彼女への愛情行為だったせいか、そんなに怖い思いはしなかったよ。心配しなくて大丈夫」

寝ぼけて勘違いされ抱きつかれたが、力強くも優しく抱きしめられて、そしてすぐ引き剥がされたから痴漢行為と感じる暇がなかったのだ。知り合いに抱きつかれたと思えばいいだろう。二度としないでほしいけど。
「本当に？」
「本当」
思いっきりうなずいた私を見て、若干浮上したようだが、まだいつもと違う。

「まだなにかあるんですか？」
「えぇ、自分の本業を忘れて山を噴火させてしまいました」
「お山さんのこと？でも、噴火なんてよくしてるよね」
「まあよくしてはいるのですが、今回のは一歩間違うと大変だったんです。ウチはお山さんの神社です。私に何かあるとお山さんに異

変が出るのです」
だから、あの主任の電話だったのか。
あとで主任から聞いたのだが、活発な火山として有名なお山さんだが、ここまでひどいのは久しぶりだったらしい。白い噴煙をあげるだけでしばらく大人しかったのにねぇと言われた。

「環さん、ウチに来ても阿吽達を触ることに夢中で由来書とか読んでないでしょ。私にあまり興味がないですよね。こちらは好きな女の子が襲われてるのを見て、我を忘れるぐらいだったのに」
…ん？なんか変なこと言われた。聞き流したいけれど、烏帽子様がじっとこっちを見ている。

「興味がないわけでもないですヨ？あんまり突っ込んでいいのかわからないので、聞かないようにしているというかなんというか」
よし、さりげなく話を逸らそう。徹夜明けにこういう話題はきつい。頭回らないもの。

「環さん、私は…」
そんな私の無駄な努力を無視して烏帽子様は話を続けようとする。
すると、がちゃりとドアが開いた。

「おはようございます」
時間はちょうど7時。当番交代が来た。
「「…おはようございます」」
部屋に漂う緊張の残滓に気づかないまま先輩は話を続ける。
「あれー。主任じゃないんですか？」
「いろいろありまして。昨日の鍵当番は烏帽子様になりました」

「へぇ。じゃあ、その色々含めて引継ぎをお願いします」
烏帽子様が昨日の主任の件や事例を引継ぎしている間に、
「お先に失礼します」
ダッシュで逃げた。またこのパターンか。

小話

「烏帽子様、デリバリーピザしたことある？」
「ないですよ。そもそもウチには電話がないです」
「チラシが入ってたから食べたくなったんだけど、女一人でピザをとるのは恥ずかしいので、ご一緒しませんか？」
烏帽子様にチラシを渡す。
「もしや、噂に聞くピザパですか！！」
「ピザパの略がピザパーティーならどこで噂になっているのか知りたいです」
「ミミにソーセージがついてる！！あ、チーズバージョンもありますよ。ハーフ&ハーフってなんですか？ピザ屋なのにお好み焼きの注文もＯＫ！？どれにしましょう？」
「・・・好きなの頼んでいいよ」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

烏帽子様大興奮で初ピザ注文。ジャンキーな食べ物も好き。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「烏帽子様、買っちゃった」
「何をですか？」
「じゃーん。阿・吽君用に、ブラシと散歩のリード」
近くのホームセンターのペットコーナーで見つけた品を献上する。
「…私も買いました」
そっと差し出されたのは、色形が全く一緒のものだった。
秋風が通り過ぎる。

「…えっと、えっと、私の方は壊れたときの予備にしよう！！」
「…そうしましょう！！」
あはははと変なテンションの２人。
「じゃ、じゃあ、早速吽の散歩にでも行ってみますか。吽、おいで」
「はい、主様」
リードをつけようと首のあたりをごそごそ探る烏帽子様が固まる。
「どうしました？」
「首輪がないと使えないタイプでした…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
おバカさん２人。
環さんは反省して、ちゃんと烏帽子様に伺いを立ててからペット用品は買うようになりました。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

５月に大学屋外プールにて白骨死体が発見され警察を呼ぶ騒ぎになる。
確認してもらったところ、備品番号１０３１と書かれており、大学祭中に行方不明になった骨格模型トミーと断定。
半年振りに教育学部保健体育科へ戻る。
新しいもの（マイク）がすでに購入済みでトミー倉庫入り。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
大学祭の名残。
結構高かったのにと環さんお怒り
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

7　恋

烏帽子視点

「阿・吽よ。今日は誰も通してはいけないよ」
返事も聞かずに言い捨てて自分の住処に戻る。一人になりたい。
もともと寂れた神社だ。阿吽に言いつけはしたが、誰も来ないだろう。朝夕、様子を見に来る彼女がちらりと浮かんだが、その人に逃げられたからこそ、悩んでいるのだ。
しばらく避けられてしまう可能性を考えれば切なくなる。徹夜で一仕事を終え、くたくたな身体は睡眠を欲していたが、頭は彼女のことでいっぱいだ。眠れない。

そう、逃げられてしまった…。

動揺して口走ってしまったとはいえ、あんなことの後に告白しようとするなんてひどい男だと思われただろうか。
昨日までの彼女は、決して自分のことを嫌っている様子はなかった。自惚れかもしれないが、自分と一緒のときは、いつも楽しそうに笑っていてくれたように思う。
本音と建前？
彼女が使い分けられるわけがない。
本人は至極まじめな顔でいるつもりらしいが、くるくる変わる表情は何を考えているか分かりやすい。
そこがよいのだけれども。

では、友人としてしか見られないということだろうか？

周辺の飲食店の情報交換や当たりだった店へ一緒に出かけたりしてきた。これは一般的にはデートと言っていいだろう。彼女の趣味は美味しいものを食べること。B級だろうが、イロモノだろうが、美味ければよしとする彼女の食への追求は他に類をみない。

近隣県で開催予定のB級グルメ大会へ誘われたときは、理由もなく担当地域から離れられないこの身体を恨めしく思ったものだ。

そんな彼女が、夕飯に誘ってくれるというのはかなり心を許してくれていると思っていた。

少年姿で接していたので、男としては考えたことはなかったようだが、一緒に学祭をまわった反応を見るに充分にその余地はある。顔を赤くして恥らう彼女はかわいかったな。

彼女とのデートで多少はしゃぎすぎてしまったのは否めないが、紳士的に振舞えたと思う。

周囲に男がいなかったと言っていたので、そこを踏まえつつもう少し違う立場へ発展させようと考えていたが、まだ早すぎたのかもしれない。その点は再検討しよう。

一番の問題点は、自分が神ということだろうか？

これまで人の子と友人となっても神ということが知られると距離を置かれることが多かった。彼女も初対面のときは、胡散臭そうな顔をしていた。

新しい世話係が来るときは大抵そんな表情をされるので、信じてもらいやすいように宙に浮くなどと分かりやすい演出をしているのだが、その後は一線を引かれてしまう。

しかし、彼女とは食という共通する趣味が分かり種族の垣根を越えてすぐに仲良くなれたし、わがままな阿にも頑固な吽ともうまく付き合ってくれているようだったので、このことは考えないようにしていたが…。
人族と神族。ふむ、避けていくわけにはいかないのか。
相談に乗ってくれそうな経験者はいたかな…。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

環視点

烏帽子様の告白もどきに答えないまま逃げて、寄せられた好意に気持ちがぐるぐるして落ち着かない私が相談したのは、大学時代の友人だった。竹を割ったような性格で学生時代もよく相談に乗ってもらっていたものだ。仕事が終わっただろう頃に電話をかけてみれば、彼女はすぐに出てくれた。
そのうえで一連の出来事を話せば、逃げたのかと呆れられつつ彼女は切り込んできた。

「それで、その神様のことどう思っているのよ？」
「だってさ、今まで中学生くらいの子だったんだよ。敬語使ってかわいいなぁと思っていたらさ、いきなりでかくなって、声もいい感じに低くなってて、いやでも男の人って意識させられた」
「あぁ、あんたいい声の人好きだもんね。ゼミも教授の声で決めたんだっけ」
「いやー、ちょっと変態みたいに言わないでよ。ちゃんと研究内容でも選びました」
若かりし頃といっても2年前の話を蒸し返されて赤面する。

「とにかく、そんな人が人ごみでぶつからないように先を歩いてくれたり、守りますとか言ってエスコートしてくれるわけよ。よくよく思い出せば、チビだったときも、遅くなったときは送ってくれてずっと女の子扱いしてくれてたのか。かと思えば、実験教室でめちゃめちゃはしゃいでかわいかったし。…なんかとにかく顔を見るたびきゅんってする」

「あんた、それ末期だよ。それで、好きってわかっていなかった方がすごいわ。両思いおめでとう」

「もしかして、私って烏帽子様のこと好きなの？でもさ、逃げちゃったよ」

「私に聞くなよ。そんだけ惚気てまだわかってないのか。あんたはその神様のことが好きで間違いないね。逃げたなら、謝ってくれば？」

「でもさ、なんかこっちの気象庁発表で火山性微動が増えているとかニュースで流れてるんだよね。これって怒ってるんじゃないのかな」

「でもさでもさってうるさいのよ。どうせ、世話係なんでしょ。すぐ会うじゃん。どっちにせよ、一度話さないと進まないでしょうよ。そっちの山って活発なことで有名だし、気にしてないでさっさと行きなさいよ」

じゃねと電話は切れた。ツーツーという電子音を聞きながら、呆然とした。

友人の後押し？を受け、神社へ向かう。足はあまり進まず、少しでも顔を合わせるのを遅らせようとする。ガードレールに座ってなんとなく空を見上げれば、簡単に見つかる冬の星座が輝いていた。

友人からばっさり断言されたが、実感がない。本当に烏帽子様のこ

とを好きなんだろうかといまひとつ気持ちが掴めない。

冷たい空気を吸って、これまでを振り返ってみる。
出会って1ヶ月、ほとんど烏帽子様は子供の姿だった。それでも、一緒に過ごした時間は穏やかで、けして嫌ではなかった。一回り年の離れた弟みたいなものだと思っていたから、結構懐まで入れていた。
実の兄にまで色気がないと呆れられていたから、こんなに共通の趣味で盛り上がれたのがうれしかった。

そりゃ、チビのときも吽君を散歩させながら車道側をさりげなく歩いたり、寒がったら上着を貸してくれたり優しいなと思っていたさ。
冗談で私がもっと若かったらねぇなんて言ったさ。
あちらが、逆にでかくなったけどね。

大きくなった烏帽子様の目尻に出来る笑い皺(しわ)を見たときや馬から降りるときに支えてくれた大きな手とかふとした折にドキドキさせられることもあった。それも認めよう。

お一人様結構な私だけど、初めて実家を離れて暮らすのは堪えていた。近くに家族も友人もいない、そんな私に突然現れた烏帽子様という存在。
おはよう。いってらっしゃい。がんばってね。おつかれさま。おかえりなさい。
穏やかな笑みと共に言われる言葉。私の心に空いた隙間に染み込んでいった。
烏帽子様の傍は心地よい。
好きなのかもしれない。

だいたい、あちらが私を好きというのは本当なんだろうか？なんだかそれらしいことを言われて含みを帯びた目でじっと見つめられたので、そんな風に思ってしまっただけで、勝手にのぼせて勘違いしてしまっただけなのではないか。だって、大学祭で遊んだときにも、友人に友達だって言っていたし。

え、何それ、恥ずかしい。勘違い？

…とにかく、逃げたことを謝るのだ。それ以上でもそれ以下でもない。

話を聞かずに逃げた私があれこれ憶測で悩んでも仕方がない。

私の体温ですっかり温まったガードレールから立ち上がり、歩を進めた。

ぐだぐだ悩んでいたら、夜風で身体がすっかり冷えてしまった。

荷物持ちさせたお礼ということでサツマイモの炊き込みご飯をタッパに詰めて持っていたが、それもすっかり冷めてしまっている。

雑穀米と角切りサツマイモを出汁で炊き込み、カリカリに炒ったジャコとごまを最後に混ぜた食感と香りを楽しむ一品。実家の家族も好きだと言ってくれる自信作。美味しいといってくれれば重畳。謝りやすくなるってもんだ。

石段を登れば、狛犬達がいる。

「こんばんわ、烏帽子様はご在宅かしら？」

いつもは歓迎ムードなのに、今日は顔を見合わせて困った顔だ。

「こんばんわ。せっかくおいでいただいたのに申し訳ありませんが、今日は誰も通すなとの言いつけで、環様でも…」

「そう」

力なく言う。
「あの、環様」
「なあに、吽君」
「主様と何かありましたか？様子がおかしかったのです」
烏帽子様はやはり怒っているのかもしれない。もしかしたら、２度と…？
悪い方向へ考え始めればきりがない。冷たくなった指先を握りこむ。
「まあちょっと。荷物を持ってもらったお礼に作ってきたからこれ渡しといてくれる？貴方達の分は蒸かして別のに入れてあるからね。またお詫びに伺いますって伝えてくれると助かるわ。お願いね」
わざと明るく言って踵を返す。

神社から自宅まで１０分。学生街へ続くこの道は街灯が等間隔で並ぶ。
烏帽子様の都合上遠くへは行けないから、近所で遊び倒すために何度もこの道を通った。
この３週間、吽君を散歩させながら２人で歩いた。待ち合わせをしてわくわくしながら歩いた。
照れながら歩いた。
朝、弱い私がいらいらしながら仕事へ向かう道があっという間に変わった。

改めて烏帽子様の存在が私にとってどんなものだったかを感じる。
「なんだ。拒否されてから分かっても仕方ないじゃんねぇ」
誰に求めるでもなく独り言は出てくるが、夜で人もいないと分かっていても涙は意地でこぼさないようにした。

さっき暖め続けたガードレールが見えてきた。家まであと半分ってところだ。
その横に置かれている自動販売機で、冷え切った身体を温めるためにＨＯＴ飲料を買う。一口飲んでは、カイロ代わりに両手で握る。
レモンのすっぱさとはちみつの甘さがじんわり染みてくる。
やばいな。早く帰らないと堪え切れそうにない。身体は温まったけど、涙の方は逆に加速しそうだ。
上を見上げて瞬きを多くしてじっとしていたら、今、一番会いたい人の声がした。
「環！！」
さっき見つけてた星座がやっと滲まなくなったと思ったのに、一瞬にしてまた見えなくなった。

そのまま振り返れば、涙がこぼれてしまうので、袖でぐいっと拭った。
夜だし、目が赤いのは気づかないでしょ。まあ拭った動作でバレバレかもしれませんが。
「こんばんわ、烏帽子様」

8　告白

走ってきたのだろう。息を切らしている。
後方からカッツンカッツン音がしてうるさいと思っていたのだが、下駄で走ってきた烏帽子様が出していたらしい。無性におかしい。

「下駄ですね」
「慌、てて、飛び、出して、きたから」
「鍵はかけてきた？」
どうでもいいことばかり聞いてしまう。
「ウチには、優、秀な、門番が、いるから、大丈夫」
息を整えた烏帽子様は私のちゃかしにもめげず、真っ直ぐ見つめてきた。
「環さん、話を聞いてほしいのだけれど、いいかな」
逃げないように牽制された気分。ついでに、肩をがっしり掴まれる。
そんなことしなくてももう逃げないよ。

「環さん、私は、神で人とは違います。貴女からしたら面妖な力も持っています。色々制約もあって遠くへは行けないですし、年はよく覚えてませんが、だいたい２５０歳のおじいちゃんでもあります。だから、貴女を楽しませることは出来ないかもしれません。今まで縁遠かったので、女心には疎いですし、実を言えばなぜ貴女が逃げてしまったのか分かっていません。それでも、私が神であっても、貴女が傍にいてくれたらと願ってしまいました。環さんが好きです。このまま一緒にいてくれませんか？」

「烏帽子様の穏やかな性格が好きです。にこにこ笑っている烏帽子様が好き。それと一緒に美味しいものを探したり食べたり作ったり、そんな時間を過ごすのも好き。私を送り出して迎え入れてくれる声が好き、笑ったときに目尻に出来る皺(しわ)も大きくて暖かい手も、烏帽子様の全部が好きです」

私の肩の上で、小刻みに震えていた烏帽子様の手に手を重ねる。なんだか自分を否定ばかりしているけど、そんな烏帽子様が好きなのだ。好きという気持ちを伝えたい。

「正直、烏帽子様は私にとって神様という感じではないのです」

カレー鍋で絡み酒したときからね。

「今まで、友人だと思っていました。または弟のようなものだと。でも、おかしいんです。兄弟や友人なら、一緒にいてもドキドキしない。用事で会えなくても、あんなにがっかりしない。2度と会ってもらえないかもと思えば、胸が潰れるような気持ちになりました。朝は、逃げてしまってごめんなさい。気づいたのはさっきですが、私は烏帽子様が好きです」

痛い、痛い、痛い。

好きですって言ったら、抱きしめられてるけど、痛い。恥ずかしがる暇もなく痛い。

「本当ですか！？本当に？」

信じられないのか、聞いてくるけど痛い。

「本当。だけど、痛いから放して」

痛いと聞いて、がばりと身体がはなされる。けど、まだ肩は掴まれたままだ。

ちょ、目が怖いし。まだ続きがあるんだけど。

「あの、でもですね。まだ、結婚は早いと思うんです。まだ私達出会って1ヶ月じゃないですか？もっとお互いをよく知っていきたいと言うか…」

「へっ？結婚？」

あれ？さっきのはプロポーズかと思ったけど違うの？

「このまま一緒にいてくれませんかって…」

「えっ。ああ！！違います、いや、そうでもいいのですけれど、そうじゃなくて男女交際の方です」

男女交際って古めかしいな。

くしゅん。手の内のＨＯＴ飲料も温くなり夜風で冷え始めた頃、テレテレな状態で浮かれていた私達は正気に戻った。

「このままここにいるわけにも行きませんね。送っていきますよ」

見慣れた苦笑いをして烏帽子様が自宅方向へ進み始める。

でも、私は進まない。

ついてこないことを不思議に思った烏帽子様が振り返る。

うつむいたまま無言で差し出す右手。

重なる右手。ついでに、上下に振られる。これは、いわゆる、握手ですね。

「…握手じゃない。左手、出して」

「ごめんなさい。はい、目的の左手です」

まだ私が何をしようとしているか分かっていない烏帽子様の左手に

右手を重ねる。そのまま横に並ぶ。
指と指を絡めて、カップルつなぎにしてやった。
「さあ、行きましょ」
何をされたか気づいて真っ赤になる烏帽子様に声をかける。あなたが進まないと私も進めませんよ。

家まで5分の道のりなのに、烏帽子様がゆっくりしか歩かないから今日はずいぶんかかる。
「烏帽子様、ご飯食べました？」
「今日は、ずっと環さんのことを考えていたから、食べていませんよ。ねぇ、環さん」
烏帽子様が呼びかける。
「なんですか？」
「ねぇ、なぜ、ずっと左側を見ているんですか？」

あなたを見るのが恥ずかしいからだよ。数分前の告白と調子に乗ってカップルつなぎもしちゃったから、いまさらになって恥ずかしいんだよ。私の顔が赤いのを分かって言ってるあなたが、にまにまして嬉しそうなのも恥ずかしいんだよ。覗き込もうとするな。

「なんでもない。今日の献立は秋の味覚がテーマです。食べてく？」
「ええ、もひろん」
私の手で顔をそむけさせられた烏帽子様からはやや不明瞭な返事が聞こえた。

出会った頃は、こんなことになるとは思っていなかった。

下駄をカランコロン鳴らして、上機嫌で歩く神様。私はその横で嬉しいやらおかしいやら大変だ。

そんな私達を祝福するかのように、大学から花火が上がる。

「グランドフィナーレの花火が上がりましたね」

「花火まで！！」

「今年も無事に終わりましたね」

「すごい」

私のアパートに到着したので2階の廊下の柵にしがみついて身を乗り出す。烏帽子様が後ろからそっと支えてくれた。

「そんなに花火が好きなのですか？」

「この時期に見れるなんて思わないじゃないですか！！」

「では、また来年も見ましょうね。実はウチからだと遮るものがなくていい場所なのです」

「はい！！」

返事をして気づいた。こうやって烏帽子様との思い出が増えていくんだ。

今回みたいに気持ちが分からず逃げてしまうことがあるだろう。それでも、烏帽子様なら受け止めてくれるような気がする。

ずっと傍にいたい。

強く願えば、分かっていますよと言わんばかりに烏帽子様が抱きしめてくれた。

大好きな私の神様、ずっと掴まえていてね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2583y/

神様と事務員

2011年11月6日03時11分発行